

# 首藤基澄著 『金子光晴研究』 を読んで

この本は「高村光太郎」に次ぐ著者の第二作である。42年あたりから著者はしきりに金子光晴を追いつけておられた。42年4月号の「文学」に「金子光晴ノート」を書かれて以来、息もつかず矢継早に「金子光晴研究覚え書」(「日本近代文学」S43・5)、「金子光晴のライトモチーフ」(「文学」S43・7)、「金子光晴の恋愛」(「日本文学叢攷」S43・8)等々を書き進められたが、本書巻末の一覧によると、それは十一編にもなっていたようである。(その中

「鮫」成立再論(本書改題「批判的リアリズムの確立」)、「鬼の児の唄」論(本書改題「抵抗のアレゴリー」)、「金子光晴の戦後」(本書改題「自叙伝の試み」(一)の三編は、本学国語国文学会機関誌及び近代文学研究室刊「近代文学手帳」にそれぞれ書かれたものであった。)

本著はこの十一編と新しく稿を起された「夢と流浪」を加えられたものに、単行本としての統一、編別構成を与え、その秩序に沿って改題し、纏められたものようである。

序説から第九章にわたる論考と、巻末の金子光晴年譜、主要参考文献、後記と配してある心くばりだけ見ても、著者が「(ここ)三年半の私のすべてである」といわれるに足るものである。

金子光晴、その詩、評論が評価され、研究対象となって来たのは

戦後のことである。この研究の歴史の浅さと、対象たる光晴自身が一筋縄で行かぬ人物であること、その作品も、著者がいわれるように「詩的方法、世界の振幅の大きい」などのために、いまだに文学史的位置づけが困難とされている模様である。

著者はその中で、光晴、光晴詩の「全面目」を一望の下に収めようと思図された。巻末の主要参考文献をみると、彼に関する多くの研究書や評論はあるが、一冊に纏って正面から「金子光晴研究」と銘打ったのは見当らない。このことにおいてもこの著は意味を持つものであるだろう。著者は謙虚にも「ささやかなレポートである」などといわれるが、どうして労作でありしたたかな野心得である。

ところでその光晴、光晴詩を一望の下に収める視点をどこに求めるかであるが、著者は「敗者の立場における批判精神」を提起される。それはかつて光太郎に「上昇しようとした自我の様態」を見た時からの著者の視点の特徴だといえよう。そういうえば著者の光晴への関心は、光太郎研究の中から「いつの頃からか分明ではないが」その対極の生を生きるものとして浮び上って来たもの(後記)だそうである。「敗者」は「上昇しようとした自我」と一対をなすものである。

この二つの類別はニーグレンの「アガペーとエロス」に範を求め

ておられるもののように（『高村光太郎』P 121）、きわめて実存的臭いのつよいものように思われる。これは本著の基本的姿勢であるといつてよからう。そして、この本著の姿勢の特質はただものでない光晴という個性の分析・理解においてなかなか有効であると思う。

著者は光晴について、若き日の「嫌悪感に準拠した」すべてのものに對する「反対」からマックス・ステルネルに影響された「エゴイスト」の立場の確立を通して、やがて第二次大戦時における戦争天皇制国家への痛烈な批判者として立現されるといふ道筋を立て、彼の変化の内的必然性を生活・恋愛・外国放浪体験や自我主義思想との出逢い等の中に求められるのである。この中で青年期の詩「反対」を後年の反戦詩・天皇制国家への批判の詩の「渊源」とみられる点や、マックス・ステルネルの影響を大きくとりあげたのは著者の新しい目であろう。

しかし、この詩人の内的必然を追求する本書の基本的姿勢は、同時に問題を含むものでもあるように思われる。アトランダムに氣の付いた点をあげてみると、一つは光晴の性向・氣質（自意識過剰・反俗・自己顕示欲・批判精神・ニヒリズム・エゴイズム等）を彼自身だけのものとして封じ込めてしまうことである。例えば光晴の「反対」の意識について前にも掲げたように「嫌悪感に準拠したものと規定し、それを「無産階級の立場」「特定のイデオロギー」に則った反対に對置される。つまりこの「嫌悪感」を「特定」でない人間々々のものと考えておられるのであろうが、ほぼ同年代の芥川（芥川は彼より4才程年長）をはじめとする大正期中産階級出身イン

テリゲンチャの諸特性とあまりにも見合うのではなからうか。彼の特異性は、まずこの大きな規定の上に立つて、その中で明らかにされねばならなかったように思う。著者は光晴の「反対」を「第三次大正文学」のメルクマールとされ、その位置づけを「現実との能動的なかわりを断念したところに確認される自我は、いうならば大正文学の最後尾に付着しており、すでに豊饒な土壤を喪失しているそのままでは豊かな実りを期待すべくもない」（P 27）と説明されるのだが、「現実との能動的なかわり」を断念しなければならなかったのはなぜか、喪失したという「豊饒な土壤」とは何なのか、問われておれば彼の性向、資質の出自が明確になっていたのではなからうか。

第二は「自我の確立」を自己充足的に「エゴを守り通すこと」と考えられる点である。多分そこから「大正文学を担った人達は相当強烈な自我を形成しており、少くとも「外観だけ」は立派さを保った人が幾人かいた。日夏耿之介もその一人であろう」（P 41）という評価が出されて来るのであろう。

しかしこれでは衰弱した自我を絶対視することになりはしないだろうか。大正文学を担った人達の「相当強烈な自我」とは、著者自身が「天皇を中枢とする一切の権力を剥ぎ棄てる」ことを「簡単にやりすごしてしまった」といわれる「大正デモクラシー」（P 108）の申し子であったはずだからである。この辺に個別論文の書かれた時期によって著者の認識に多少のずれがあるように思われるが、本著の成り立ち上止むを得ないのであろうか。

もし作家、詩人が、かつて中野重治氏の透谷、二葉亭・独歩・啄

本等を評していわれたように、完成せる芸術をでなく、「人生の全般的考察」を目指すものであるとするならば「自我の確立」によって何が創り出されたのかが問われるべきだろう。そしてその何かが光晴の場合、日本人の心を芯から蝕んでいる根源への徹底した批判の文学的造型であった故にこそ、われわれはその文学、その生き方をすぐれた財産の一つにすることができるとはなからうか。そういう考えからすると、著者が「自我に固執する」こと自身が目的となっている大正期文学の担い手たちの「自我」を高く評価される、あるいは著者自身のそれがほとんど重なり合って映っていることによつて、大正期文学者の自我からはみ出す光晴の、そのはみ出す部分を切り落すことになっていないだろうか。著者が、自我の確立の問題を詩人の内部の問題として追求されるのではなく、社会的、歴史的問題とのかかわりにおいて扱えられておるなら「市民社会の一員」としての人間的要求を獲得して行く第一階梯である自己変革の積極性には欠けていたといわねばならない」と「自我に固執した抵抗者光晴の限界」(P127)を示されることもっと異った色あいで映ってくるだろう。

「自我に固執する」ことは著者もいわれるように彼の場合強権に対決する方法であった。それは「特定イデオロギー」に抛る人々の組織的抵抗は弾圧されるにまかされ、著者が希望するような市民運動的なものを構想、実践できない日本の社会の中でのことだったのである。(野間宏の小説などによると京都の知識人を中心にして人民戦線的な運動の卵みたいものがあつたらしいが、結局は発展させられなかったものようである。)  
「寂しさの歌」はそこから生ま

れてくるものであると思う。著者はその最終連を弱さの露呈した部分といわれるけれども、あの詩のモチーフは日本の本質を暴露する前半にあるのではなくて最終連にあるのではなからうか。前半の日本のさびしさと、さびしさをかつきと受けとめるもののない最終連の寂しさは自ら異なる。それは前半の日本へ能動的に働きかけるものを求める声だといえないであろうか。

光晴が「自己変革の積極性に欠け」ることは市民的抵抗運動が組織されなかったこととともに、近代社会ではあつても、自由・平等・自治を抛り所にして生まれた市民社会でないという深刻な矛盾を背負わされた日本の近代の課題であるし、われわれ自身からして、この歴史の軌からどれほど自由でありえているか自問されるころなのである。著者のいわれる「公状況と私状況」は光晴の頭の中で「止揚」できる性格のものではなく、日本の現代の複雑な歴史過程の中で、光晴を含めたわれわれ自身が実践的に「止揚」させねばならないものであると考える。

ことばにこだわっているが、前記引用文で著者は「市民社会の一員としての……」といわれていることについて、厳密な意味で戦時下の日本は「市民社会」などでは全くなかったことを付言しよう。名目的にしる市民社会になったのはたかだか敗戦後のことである。

第三に光晴の政治への関心についての著者の理解である。著者は光晴が「ステルネルとの出合い」によつて示唆されたのは「無政府主義という政治的立場でなく、自己確立のために一切を拒否するニヒリズム」(P45)であつたといわれ「較」の思想についても、「政治的には帝国主義反対ということだが、光晴個人としてはステイ

ルネルの自我主義者としてのニヒリズム（否定主義）の立場に立っていたのである」（P 95）と評され（一編の完結した詩の思想に政治的には……光晴個人としては……を見るのはいささか奇異だが）何とかして政治と自我主義・ニヒリズムを切り放し、後者に光晴を閉じ込めようとしていたように思われる。

たしかに光晴には何々主義とか党とかいって意味での政治的立場は考えられないだろう。しかし彼は日本の文学者に数少ない（特に大正期のそれには）強烈な政治感覚の持ち主である。それも自分を全くの無権利、裸の立場において強権に対峙するというものである。

彼のニヒリズムもこの強烈な政治感覚とかかわってあるものだと私は考えるがどうであろうか。つまり、現実社会すべてが人々にとって邪悪で、否定すべきものと考えられるにもかかわらず、それを撃破する具体的方策を歴史的にいまだ構想しえない時、人々はこれを観念上で全面否定するか、あきらめて現実を容認するしかないが、光晴のニヒリズムも、近代市民社会が当然持つべき自由・平等・自治を欠落させられ、閉塞した日本の現実に向っての全面否定に他ならないと考えるからだ。著者はもつと光晴自身の次のようなことばに耳をかたむけてよかつたのではなからうか。つまり、関東大震災で、かねて面識のあつた大杉栄の官権による虐殺事件に「大きな衝撃をうけ」そのため「厭世的にさえなつた」といい、彼の政治への関心の土台はそのことや、当時はじめて接した「クロボトキン・バクーニンの著者」によって「そのとき目に見えず築きあげられたのかも知れない」（「政治的関心」——僕の遍歴——）等々。そうすれば、辻潤のことばを借りてステイルネルからむりに「無政府主義」をは

ぎ落さなくてよかつたのではなからうか。光晴は明治中年に生まれ、明治末・大正初期に人となつた世代に見られる無政府主義的志向を持つ人の一人であつた。この期の無政府主義は時代閉塞の現状を根本的に克服する具体的方策の発見のないまま突破しようとするものであつたし、そのため潜在的にニヒリズムがただよつていた。そういう時代の与えた下地を前提に置く必要はないか。「徹底した人間不信と、その究極のところでは壮大な人間信頼の夢をはぐくんだ詩人」という安東次男氏の評もその意味で理解されるだろう。

ともあれ光晴は日常的にも詩作の上でもきわめて政治的関心の強い人である。というより「僕にとつては詩の完成などは、まず第二段で、ある政治に抵抗するために、便宜な一方法としてふたたび詩を選んだという経緯なのだから」（「政治的関心」——不平不満の詩——）といい、「今日も東南アジア民族の解放と、人種問題と、日本人の封建性の指摘と、戦争反対の四つの課題に創作目的の重点をおくことにしている。」（同上——僕の遍歴——）人である。著者のいわれるように、「自己確立のために一切を拒否するニヒリズム」にとりつかれていたとも、無方向な「反対」をとらえてばかりいたとも考えられない。

著者の論法でいくとステイルネルによつて「裸にされ」「何ものにも繫縛されない自我主義者に己を錬成して行つた」（P 95）ことが反戦即反天皇制・反国家に到る道になるのだが、著者のいわれるようにステイルネルから無政府主義を受つがなかつたような脱政治的的自我主義者で光晴があるとすれば、戦中の反国家・反天皇制といった構想はどこから出てくるのであろう。

国家・天皇制というのは高度に抽象的怪物で日常手にとつてみる  
ことのできにくいものである。近代の作家たちが家・親への反逆は  
できてほとんどそこに到り得なかつたのはその故であつたと思  
う。

著者は光晴を「特定のイデオロギー」から守ろうとされるあまり  
彼が抹殺されるのを覚悟で、戦中の日本のなだれ現象を見すごせず  
「進歩主義者」の立場から、畑中繁雄氏と共犯で「詩」のかたちで  
勉強の結果を発表したことも、前記無政府主義との関係にも、彼自  
身がある時期の自分を「当時僕は、左翼的な思想に没頭していたの  
で、その（詩―古庄）方法は、自然左翼的なものの考えかたになり  
解釈もそんなふうになつた。」（「詩人」ということも黙殺され  
るが、光晴自身は著者ほどには「特定イデオロギー」を恐れていな  
かつたように私には思える。「異邦人の目」と共に、クロボトキン  
・バクーニンの著書、レーニンの『帝國主義論』をよみ「左翼思想  
に没頭し」た時期もつからこそ、国家や政治体制を自分と等身大  
で把えることができたのだともいわれないか。ただ彼はそれを著者  
のいわれるように「主義主張」としてでなく具体的な生きた人間の  
問題として理解したのである。著者は光晴の「かつてステイネリア  
ンだった僕は、個人的感性でだけ事物判断のできない一九世紀デカ  
ダン族の遺物のように思われているらしいが」（「不平不満の詩」  
）をどう読まれるであろうか。ともかくステイルネルを軸にするだ  
けでなく、その辺の関係を総合的に把握する必要があるように思わ  
れる。

最後に別個の問題について一、二、

一つは著者の詩の読み方が私小説的、あるいは散文的でありすぎ  
ないかということ。特にP 78〜80収の「三点」の「母」の解釈など  
について。作品は現実から立のぼつたものであつても、既に別の秩  
序を持つ世界をつくり上げているものである。それを部分的に現実  
に引き下げて読むのは作品の世界をぶちこわすことにならないだろ  
うか。著者は例えば「鯨」を日本帝國主義とよみかえられるが、暗喩  
の機能をふまえたよみ方をすべきではないか。すれば、詩の思想を  
「政治的には」「光晴個人としては」とよむ分裂も防げる。

その二は、光晴が抵抗の「栄光者」といえるかどうかのくだり  
で、「太平洋戦争が連合国側への全面降伏として終結した以上、日  
本の抵抗者の中に「栄光者」と呼べる人がいたとは考えられない」  
（P 14）といわれていることについてである。著者によれば何が何  
でも全面降伏したことが敗者になることなのであるか。抵抗とい  
う立場からいえば、日本人による日本人自身の解放ができず、武器  
をもつた、勝者としての連合国によって民主主義の手ほどきを受け  
ねばならぬという歴史の悲劇（喜劇？）こそ、日本の中の抵抗者の  
反省があるべきなのではないのか。このことがはつきりしないと、  
光晴の抵抗が何に対してであつたのか、明治以後のすぐれた文学者  
のさまざまな形で抵抗が何であつたかもわからなくなるように思  
われる。

以上は、一介の光晴詩・評論愛読者としての読後感想である。著  
者に御教示をいただければ望外のよろこびである。（古庄ゆき子）